

# 亡き子思い本棚作り

## 木作家、石巻の小学校に贈呈へ

### 同じ境遇の米国人に協力

宮城県石巻市で津波に巻き込まれて外国語指導助手の米国人女性が亡くなり、その父親が娘の教え子たちに本を贈る取り組みに、同県の木作家が協力する。手作りの本棚をプレゼントする木作家は、自身も津波で3人の子どもを失った。



本棚の近くに置く木製ベンチをみがく遠藤伸一さん。宮城県東松島市、川端写す

東松島市の工房「木遊木」。子ども向けの本棚と、近くで本を読むための小さなベンチができあがりつつある。自然の木肌の色合いが特徴だ。

「天然のオイルで仕上げ、安全を大事にしています」。遠藤伸一さん(42)は話す。

震災の時、遠藤さんは内装工事を請け負っていた石巻市内の会社でいた。急いで沿岸にある市内の自宅に戻ると、中学1年の長女、花さんと母は家にいた。小

学4年の侃太君、2年の奏さんを学校に迎えに行っても自宅に残し、親族の様子を見にいこうと車を出した。

津波はその後に襲ってきた。車ごとのまれ、脱出してしがみついた家屋も流された。避難所で一夜を過ごした。翌朝、家の場所に着いたとき、母が奏さんを抱きしめていた。「ごめん。冷たくなってる……」。花さんは家の中で亡くなった。侃太君は数日後に見つかった。

市内の職場から歩いて帰ってきた妻の綾子さん(42)は泣き崩れ、震災後、難聴になった。避難所で考えた。子どもに作った木の椅子も流されてしまったが、自分の仕事が好きだったあの子たちに恥ずかしくない

生き方をしたい。もう一度仕事を始めよう――。

石巻市の小学校に派遣されていた外国語指導助手の米国人女性、テイラー・アンダーソンさん(当時24)が震災で亡くなり、父のアンディさんが娘が教えた石巻の子どもたちに書籍を贈ろうとしていることを聞いた。テイラーさんのことは、子どもたちから話を聞いていた。

本は「テイラー文庫」として、今月6日に石巻市の万石浦小学校に寄贈される。合わせて本棚も贈る予定だ。

「津波の記憶を風化させてはいけないと思う。そのために『木』の仕事でできることを続けたい」。遠藤さんはそう思っている。

(川端俊一)

被災地から